

研究ノート

## 大学における日本文学研究者の形成

— 戦前期の高等教育拡大期を事例として —

原 田 健太郎  
野 本 瑠 美

Received: 7 August 2024 / Accepted: 24 December 2024

### — <要 旨> —

本稿は、特定の専門分野の学問知の形成過程を明らかにするため、高等教育研究と専門分野における研究の成果や知見を統合したうえで、新たな方法論の提示を試みるものである。具体的には、日本文学分野を事例として、日本文学研究者が養成され、高等教育機関に配置されていく過程について、日本文学研究の側から明らかにされてきた学問史上の発展と、高等教育研究者が明らかにしてきた制度上の展開を統合して検討することで新たな知見を得ることである。

研究の結果、従来指摘されてきた大学教育の経験を有することに加えて、自校が出版している雑誌での論文執筆が、帝国大学教員になるための必須条件に徐々になっていったことが明らかになった。一方で、私立大学の教員においては、帝国大学のような明確なモデルが存在せず、多様な背景をもつ教員が誕生していた。日本文学において、その学問的基盤の形成には東京帝国大学の役割が大きかったものの、それ以外の大学の教員の学問上の貢献も大きく、様々な研究環境に置かれていた日本文学研究者が学問の形成を担っていたことが明らかになった。

\*島根大学教育学生支援本部・講師

\*\*島根大学法文学部・准教授

## 1. 問題の所存

2015年に端を発した所謂「文系学部廃止論争」は大きな議論を巻き起こし、とりわけ人文学研究の側で、自身が専門とする学問知と社会の関わりを問い直し、学問分野が大学に置かれた始発期を振り返る研究が行われるようになった<sup>1)</sup>。これらの研究は、専門分野の学問知に対する正確な理解に加え、年史を活用した丹念な資料分析が行われており、研究上質の高い側面がある一方で、大学教員の形成過程や講座制といった高等教育研究の知見が十分に活用されているわけではないという課題も残る。

一方、高等教育研究では、制度や政策、更には機関レベルでの経営などに主たる関心が寄せられ、細分化された学問分野一つ一つの形成過程を追究することはほとんどなされない。また2015年以降の人文学分野における上記のような研究成果についても、「専門外の研究者による高等教育研究」として等閑視されている。

本稿は、このような学問的懸隔のある人文学研究と高等教育研究の両者を架橋し、その成果を統合したうえで、学問知の形成に関する新たな方法論の提示を試みるものである。具体的には、日本文学分野を事例として、明治以降、日本文学研究者が養成され、高等教育機関に配置されていく過程について、日本文学研究の側から明らかにされてきた学問史上の発展と、高等教育研究の知見である制度上の形成過程を組み合わせながら検討し、日本の高等教育の構造の一端を明らかにすることとしたい<sup>2)</sup>。日本文学は、いち早く、大学制度に位置づき長い歴史を積み重ねて、現在に至っている。一方で、国語イコール日本文学と誤解されやすく、高等教育で学ぶべき学問分野かと疑問視されることもある<sup>3)</sup>。文系学部廃止論争でも俎上に載せられやすく、社会の中での学問の存在意義が問われ続けた学問でもある。その意味でも、社会と学問との関係を考える上で、重要な専門分野であるともいえる。

よって、今回は日本文学のみを扱うが、今後他の専門分野の学問知の形成過程を明らかにするための新たな研究手法や研究の観点も提示したい。

## 2. 先行研究の整理と課題の設定

日本文学の学問知に関する先行研究は、主に大学史や高等教育研究によって行われた研究群と、日本文学研究者によって行われた研究群の二つが存在する。以下、それぞれ整理を試みたい。

大学史・高等教育研究においては、寺崎（1972）における先駆的な研究があげられる。日本の大学は万学を志向した結果として、欧米の輸入学問だけでなく江戸時代以前の「漢学」や「国学」等の伝統を受け継ぐ学問も扱われるようになったという。そのため、文学部においては早期から日本文学に該当する学問が文学部内に位置付けられた。

これに後続する「大学における日本文学」研究と関連するものとしては、大学の「文学部」の研究があげられる。大川（1993）は、東京大学における「文学部」の形成過程を明らかにしたうえで、文学部の今日的意義を検討している。その後も戦前期の文学部の構造と機能を明らかにする研究として、帝国大学文学部における教員の形成と変容の実態を明らかにしたもの（橋本 1995）、卒業生の就職状況を検討したもの（橋本 1996b）、教育と研究の内実や学生の状況を明らかにしたもの（橋本 1996a）等があげられる。更には、文学部は戦前期の教養主義の受け皿であり、文学部卒業生が、その知的基盤を支えたことも明らかにされてきた（竹内 2003、橋本 1996a）。すなわち、文学部とは他学部と比較して学生からの人気は無く、就職市場でも不利であり、様々な課題を有している一方で、その卒業生が旧制高校や旧制中学の教員となることで、日本のエリート集団の知的基盤を牽引する役割を担ったこと等が明らかにされてきたのである。

このような戦前期の文学部の研究であるが、いくつか課題もあげられる。一つ目は、先行研究でも指摘されていることであるが、その研究蓄積が十分でない点である。二つ目の課題は、数少ない研究の中でも帝国大学がその研究対象の中心であり、私立大学の検討を行ったものが部分的にしかないことである。三つ目の課題は、文学部の学問的内実にまで踏み込んでいないということである。たとえば、橋本（1995）は文学部教員の形成過程を詳細に検討しているものの、文学部内の学問知の形成過程にまでは言及していない。最後に四つ目の課題として、多様な学問群から構成される文学部を一つの対象として設定していることである。文学部の中には、必要となる語学の多様性はもちろんのこと、歴史学、言語学、文学、哲学、社会学等、多岐に渡る方法論の学問群から構成されている。文学部の研究は、このような学部内での多様性への配慮という点では限界がある研究群でもある。

次に、もう一つの研究群として、日本文学者による一連の研究があげられる（長島編 2011、諏訪 2014）。これらの研究群は、江戸期の国学と明治以降の学問の連続性と断絶を文献調査に基づき明らかにしている。これらの研究群に共通することは、明治初期の「東京大学」の創設から、1882年の

古典講習科の設立までが主たる関心となっていることである。結果として、東京大学創設期から帝国大学への発展段階での日本文学研究の形成に主たる関心もたれるため、その時期の帝国大学教員である、芳賀矢一や藤岡作太郎が主な研究対象となっている。近世文学を対象に、その分析対象となる期間を広げる研究も見られるが限定的である（井田 2014）。

近年では、日本文学の形成を担った研究者を幅広くとらえる研究も見られるものの（佐々木 2021、田淵 2021）、人物研究ということもあり、対象とした研究者の研究内容に主たる関心もたれている。

そこで本稿では、以下の事項に取り組むこととする。初めに、「東京大学」の創設からおおむね新制大学が発足するまでの期間を対象として、日本文学者が育成され、高等教育機関に配置される過程を明らかにする。考察の対象には、帝国大学に加えて、主要な私立大学も含める。同時に学の担い手であるそれらの研究者に求められたことを検討するとともに、各大学の研究者の配置状況や専門性も検討し、学問知の形成の基盤にあったものを明らかにする。

### 3. 戦後の大学教授市場

日本文学者の検討に入る前に、先行研究との比較を行うとともに、戦前の状況を反映している参照軸を作るための統計分析を行うこととしたい。

本稿では、日本文学研究の全体像を把握するために、『大学研究者・研究題目総覧』（日本学術振興会 1971）を用いることとする。同資料は、日本文学研究の全体像を把握することが可能となる最も古い資料であると考えられる。文部省の調査でもこのようなことは行われていないであろうし、関連学会の会員情報等は散逸しているであろう。その意味では、貴重な資料となっている。

なお、本資料の10年前に『大学研究者・研究題目総覧』（日本学術振興会 1961）で専門分野毎の教員一覧を作成しているが、国語学と日本文学が同一のカテゴリーに含まれており、日本文学者の全体像を簡単に把握することができないため、本資料を用いることとした。

表1は、1970年における日本文学研究の出身大学の一覧である。最も多くの教員を輩出していたのは東京大学である。それに次ぐのは京都大学である。このように、この時期の日本文学の大学教授市場において優位な立場にあったのは、帝国大学を基盤に形成された大学群であったことが分か

る<sup>4)</sup>。しかし、それに続く大学として、早稲田大学があり、東京教育大学がある。日本文学研究者の状況を整理すれば、旧帝国大学群としての東京大学や京都大学があり、旧高等師範学校としての東京教育大学や広島大学があり、私立大学群としての早稲田大学や國學院大学があげられる。

この点、同時期に大学教授市場の把握を試みた先行研究（新堀 1965）との比較を通して検討を行いたい。国立大学については、東京大学と京都大学による市場の独占状態がある点は先行研究と概ね一致している。ただし、先行研究においては三番目に教員を輩出していた東京外国語大学が無いことに相違点が見いだせる。加えて、東京教育大学や広島大学の市場占拠率は、文学部全体と比較して高い。大きく異なることは私立大学出身者で、先行研究で有力大学として指摘されている早稲田大学が登場するのはもちろんのこと、國學院大学や日本大学といった大学名が挙がってくることは先行研究と異なる部分である。この点は、日本文学研究者固有の特徴であると考えられる。

表 1 日本文学研究者の出身大学（1970 年時点）

		教員数
旧帝国大学	東京大学	292
	京都大学	108
	東北大学	44
	九州大学	24
旧高等師範学校	東京教育大学	74
	広島大学	52
私立大学	早稲田大学	89
	國學院大学	63
	日本大学	30
その他		262
合計		1,038

注：根拠となるデータは、「大学研究者・研究題目総覧：専門別 1971 年版」である。教員数は、当時設置されていた大学の出身者に加えて、その大学の前身となる学校出身者も含めている。例えば、東京大学の場合、東京大学出身者と東京帝国大学出身者の合計の値を掲載している。他大学についても同様の処理を行っている。

それでは、いかにしてこのような状況が生み出されたのか。本稿では、これらの学校群について、新制大学発足までの期間に着目し、次節以降でその検討を行うこととしたい。

## 4. 機関レベルでの検討

### 4.1 官立セクターの状況

初めに、各大学の設置時期を整理する。東京大学が設置されたのは 1877 年である。設立に併せて文学部が設置されており、日本文学を扱う土台は既に出来上がっている。その後も、帝国大学、東京帝国大学、東京大学とその名称を変えていくが、文科大学、文学部及び日本文学のための講座等は維持されることになる。

それに次ぐ形で京都帝国大学文科大学が設置されたのが 1906 年（大学の設置が 1897 年）であり、東京大学文学部の設置から実に 30 年近くを要したことになる。

最後に、その他の帝国大学の概要を見ると、東北帝国大学法文学部の設置が 1922 年（大学の設置が 1907 年）、九州帝国大学法文学部の設置が 1924 年（大学の設置が 1911 年）となっている。東京大学の設置から、これらの大学群の文学部や法文学部が設置されるまでには随分と時間が必要であったことが分かる。加えて、大学が設置されてから文学部や法文学部が設置されるまでにも時間を要していたことが分かる。

後発の帝国大学における日本文学を扱う部局については、模倣に基づく伝播という点でも共通する事項がある。医学や工学といった専門分野が、後発の帝国大学で幅広く、かついち早く伝播したのに対して、文学のそれは限定的であり、伝播のタイミングも遅い。ただし、これは、法学部も同様の状況にあったことから、日本文学固有の問題というよりも、帝国大学における文科系学問の特徴であったといえる。このように、帝国大学において日本文学を扱う部局があったのは 4 大学にとどまる。天野が指摘するように、帝国大学とは未完の大学であった（天野 2017）。

次に、高等師範学校の概要を見ると、東京の高等師範学校が整備されたのが 1886 年となっている。高等師範学校には、当初より国語科の教諭が配置されており、ここが日本文学研究者の勤務先となりえていた。東京の高等師範学校は、1929 年の東京文科大学の設置を経て、東京教育大学、筑波大学へと変化を遂げる。

高等師範学校についてはその後も複数校設置されることになる。これらの学校群の国語科教諭は、日本文学研究者の勤務先となりえたと考えられる。

ここで留意すべきは、東京の高等師範学校が整備されたのは、京都帝国大学の文科大学が設置される20年前ということである。すなわち、高等師範学校が日本文学研究者の勤務地にいち早くなりえると同時に、主たる目的ではないものの、高等教育機関の教員養成機能も担うこととなる（山田2002）。実際、日本学術振興会（1971）の中には、高等師範学校が最終学歴となる日本文学者が一定数存在している。

それでは、いかにして東京の高等師範学校の設立がこのように早期に実現したのであろうか。一つの背景として、東京の高等師範学校の教諭の多くは帝国大学の卒業生や教員であったことがあげられる。すなわち、教員の確保という点で有利であったと考えられる。

最後に、官立の専門学校に目を向けることとしたい。新制大学より前の高等教育システムでは、大学に加えて、専門学校や高等師範学校等から構成されていた。複線型とも呼ばれるこの教育システムでは、大学で扱う工学や農学、医学等の専門学校が数多く設置されることになる。帝国大学と比べれば安価に設置が可能な学校群であったことから、帝国大学と比して、これらの学校群が多く設置されることになった。

しかし、文科系の専門学校に目を向けると、明確な形での官立専門学校での設置はなかったようである（文部省大学学術局技術教育課編 1998）<sup>5)</sup>。新制大学が発足する前までの官立専門学校は、前述したように理科系のそれが多く、文科系では経済系の学校が複数設置されているのに留まる。

官立の高等教育機関における日本文学研究者の勤務地は、旧制高等学校であった。実際、旧制高等学校での勤務を経て、帝国大学の教員につく事例は多数見られる<sup>6)</sup>。ただし、旧制高校はあくまで大学教育の準備教育の場であり、大学教員の養成は行っていない。

戦前期の官立の高等教育セクターについては、帝国大学はもちろんのこと、文科大学の設置等はあったものの、高等教育システム全体で見れば、理系偏重の未完の教育システムであったことが指摘できよう。

## 4.2 私学セクターの状況

次に、私学の概要を見ていくこととする。本稿では先の統計分析の結果に基づいて、教員を数多く輩出していた三大学（早稲田大学、國學院大学、日本大学）に絞って検討を行うこととする。

以下では、個々の大学の状況を概観する。

早稲田大学の場合は、前進となる東京専門学校を設置が1882年、大学への昇格が1920年である。1891年には東京専門学校時代にいち早く日本文学も扱う「文学部」の設置が見られる。その後、専門学校令や大学令を経て、学校の整備とそれに伴う大学への昇格を果たすが、その際にも文学部が設置され、日本文学の教員が配置されている（早稲田大学大学史編集所 1990）。

ただし、日本文学の勤務地が安定的に確保されていたわけではない。資料に基づけば、1920年の正式な大学昇格まで、日本文学を主に教授する学校組織は、大学部に限らず、専門部や高等師範部となり、位置づけも変容している（早稲田大学百五十年史編纂委員会編 2022）。このように、日本文学と関連する専攻の位置づけは、紆余曲折があったとされる。日本文学研究者の勤務地は非常に不安定な状況にあったことが指摘できよう。

ただし別の解釈も可能である。私立大学の場合、大学とは別に、予科はもちろんのこと、専門部や高等師範部といった異なる学校群を設置していた。早稲田大学の場合、大学昇格後も、専門部と高等師範部は継続させている。これらの学校群が日本文学研究者の勤務地になっていた点は帝国大学とは異なる所である<sup>7)</sup>。

國學院大学については、前身校となる皇典講究所の設置が1882年、國學院の設置が1890年、そして國學院大学に昇格するのが1920年になる。皇典講究所が、日本の古典を研究するために設置されたことから、日本文学が教育・研究の対象となっていた。実際、皇典講究所が設置された際には「文学部」が設置されている。その後大学に昇格してからも文学系の単科大学であり、そこには日本文学の専攻が設置されていた。

ところで、國學院大学もまた、高等師範部の設置が見られるし、神職部や神道部といった、神職を養成する教育機関を有しており、そこで、日本文学研究者による教育がなされていたことが資料から確認される（國學院大学校史資料課編 1994）。

最後に日本大学の検討を行う。ただし、これまで検討した二大学と比して、日本文学研究者の勤務地ができるまでは、長い時を要した。日本大学は前身となる日本法律学校の設置が1889年であるが、専門学校令下の、日本大学時代にも文科の設置は見られず、大学令に伴い、1920年に日本大学が設置される際に法文学部の設置に至る。しかし、国文学専攻の設置は、1924年まで待つことになる。これと前後する形で、高等師範部の国語漢文科の設置や専門部の文科国学専攻の設置等も見られる。日本大学の場合、前述の二大



学と比して、設置の時期は遅い。

この三大学の共通点は、大学はもちろんのこと、予科や専門部、高等師範部の設置が見られ、多様な学校群が確認されることである。これらの学校群であるが、先行研究においては大学経営を安定化させる機能があったことが述べられている（丸山 2002）。確かに、この点は間違いではないが、研究者の勤務地という観点に立てば、異なる見方もできる。すなわち、専門部や高等師範部が、日本文学研究者の勤務地として機能していたことである。大学とは異なる勤務形態であり、大学と同列に扱ってよいかは議論の余地もあるが、後述するように、これらの学校群に所属した教員もまた、研究を行い、日本文学研究を切り開いていったのである。

なお、私学セクターについては、官学セクターと比して、文科系の専門学校が複数設置されている。総合大学を志向した、東京専門学校や慶應義塾には設立初期から文学科が設置されており、大学への昇格を経て文学部となっていく<sup>8)</sup>。それ以外にも、哲学館や二松学舎等の専門学校に加えて、大学に並置される高等師範部や専門部等が複数存在した。このように見ると、戦前期において、文学系学部・学科の拡大を担ったのも、私立大学という側面があった点は留意が必要である。

## 5. 各大学の研究者の配置状況

### 5.1 東京帝国大学の事例

前章では、機関レベルでの検討を行った。それを踏まえて、各大学での教員の配置状況を見ていくこととする。

初めに設置された、「東京大学」時代において既に、日本文学を扱える研究者が配置されている。具体的には、黒川眞頼や物集高見等がそれに該当すると判断してよいであろう。ただし、年史にも記載があるように、彼らの専門は、「国学」である。専門の幅が日本文学よりも広がったと考えられる。国学とは、文学に加えて、史学や法制、言語学等を扱う総合的な学問であるからだ。

二つ目に指摘できることは、いわゆる「お雇い外国人」が明確には存在しないということがあげられる。関連分野の教員として、バジル・ホール・チェンバレンがいるが、学の祖とはいいいにくい。その代わりに、「大学教育を受けてない国学者」によってその「教育と研究」が行われていたのである。初期の東京大学及び帝国大学は、明治以前の伝統を受け継ぐ「学者」によっ

て教育と研究が行われており、この点は、「お雇い外国人モデル」とは様相が異なることが分かる。

転換点は、日本文学と関連する講座の設置である。講座制の意味は先行研究で繰り返し述べられているとおり、講座制の導入により、それまで必ずしも明確でなかった個々の教員の専門分野が明確化することにある（寺崎2007）。ところで、帝国大学の日本文学と関連する講座として初めに設置されたのは「国語学、国文学、国史」の四つの講座であった。その後、「国史」の二講座と「国語学、国文学」の二講座へと分離することになる。日本文学と関連する講座の初代教授は物集高見と考えると良いであろう。彼は6年程講座の教授をつとめるが、芳賀矢一が助教授に就任する直前に帝国大学を退官している。この芳賀は、東京大学時代の文学部の卒業生であり、大学教育を受けた経験が無い物集とは対照的である。芳賀は同大学で文学教育を受けるとともに、講座の助教授に就任後、ドイツへの留学も行ったうえで、講座の教授になっている。

講座制が開始されてから数年間で、それまで教授職にあった物見高見や黒川真頼等といった国学者が東京大学を離職している（東京大学百年史編集委員会編 1986）。離職の明確な理由は分からないものの、講座の設置を経て、東京大学での教育経験を有し、海外留学経験のある研究者が講座教授を独占するような力学が働き、その結果として、何らかの排除の力学が存在したことが想像される<sup>9) 10) 11)</sup>。

芳賀は1922年に、東京帝国大学を退官するまで講座教授を務めることになる。同講座にはその後、芳賀の後輩である藤岡作太郎が助教授として1900年に加わることになる。

次に、彼らの専門性を検討することとしたい。日本文学については、その専門性を上代文学、中古文学、中世文学、近世文学、近代文学の五つに分けることが一般的である（久保田編 1997）。そこで、ここからは彼らが執筆した研究論文から彼らの専門性の検討を試みたい。検討に当たっては、国文学研究資料館が提供する国文学論文目録データベースを用いる。同データベースには明治以降の日本文学の研究論文が掲載されている。同データベースに登録されていない論文があるという課題はあるものの、個々の論文の専門が記載されており、個々の教員の専門分野を探る上では有益なものとなっている。

表2 東京帝国大学の日本文学研究者の研究業績

	雑誌			専門分野					
	帝国文学	国語と国文学	その他	上代文学	中古文学	中世文学	近世文学	近代文学	その他
芳賀矢一	9		1		1	4	1		4
藤岡作太郎	4				2				2
藤村作	3	4	3		1		5	1	3
島津久基		10			5	5			
久松潜一		9	1	1	2		3	1	3
池田亀鑑		9	1		5		1		4
守随憲治		8	2				10		

表2は、東京帝国大学教員7名の初期の論文10編がどの雑誌で発表されたか、それらの論文の専門分野が何かを示したものである。彼らの業績は膨大なものであり、その多くが図書である。その意味でデータ上の限界はあるものの、彼らの初期キャリアの一端を知ることは可能となっている。

初期の教員である、芳賀の研究は実に多岐に渡るし、藤岡作太郎については、早逝したこともあり、論文の業績は4報で判断が難しい。しかし、その後、徐々に教員の拡充が行われる中で、その専門性が明確化していく。藤岡作太郎の後任として1910年に着任したのは藤村作であるが、彼の研究業績の多くは近世文学である。

藤村以降の東京帝国大学の教員の着任の状況を見ていくこととしたい。芳賀の退職の後、1922年に島津久基が、1924年に久松潜一がそれぞれ着任している。その後、1934年に池田亀鑑が着任している。そして、藤村の退職を経て、1937年に守随憲治が着任しており、新制大学発足直前には4名体制の教員にまで増員されることになる。なお、これら全ての教員は東京帝国大学で教育を受けているという点で共通している。

そして、時代を経ると同時にその専門性が徐々に明確化する。久松潜一の研究領域は多岐に渡るため整理が難しいものの、中古・中世文学の島津久基、池田亀鑑、近世文学の守随憲治といった整理が可能となっている。

ところで、彼らについては、東京帝国大学が準備した研究の場である雑誌での研究活動を行っているという点でも共通点を見いだせる。

初めに、芳賀の時代の場合、帝国大学文科大学が発行した雑誌『帝国文学』にその業績を掲載している。藤岡は、短命であったこともあり、業績が少ないが、発表の中心は『帝国文学』である。

1924年に、東京帝国大学の国語学、国文学講座が独自に、雑誌『国語と国文学』を発行することになるが、同時期に着任した島津と久松の業績は、同雑誌に集中することになる。そして、彼ら以降に着任した教員はすべて、同雑誌への執筆を行っていくことになる。

初期の芳賀の業績が『帝国文学』中心であるのとは対照的に、研究成果を発表する場が徐々に変貌していた。これは、雑誌の整備（天野 2009）によるものであるが、それは東京帝国大学の日本文学研究者がなさねばならない仕事が徐々に定められたことを意味する。

このようにして、東京帝国大学の教員の条件として、大学教育を受けた経験、大学が準備した雑誌への論文執筆といった事項が一般化するようになる。

なお、東京帝国大学のもう一つの特徴は、日本文学と国語学が講座としては明確に分かれていることである。講座名称としては、国語学、国文学講座ではあったが、第一は国語学の講座として、第二を日本文学の講座として、それぞれ明確に分けられていた。これは、十分な教員数を確保できたことに起因すると思われる。

## 5.2 京都帝国大学の事例

次に、京都帝国大学の事例を見ていくことにする。同大学の初代の講座教授は、幸田露伴である。彼は大学教育を受けた経験はなく、加えてその専門性の評価は分かれる所である。しかし、直に退職し、後任として藤井乙男が1909年に着任している。藤井は（東京）帝国大学の卒業生である。

そして、その後のすべての教員は大学教育を受けた上で教員となっている。すなわち、京都帝国大学は、東京帝国大学と同様の形をとることになる。この点で、同大学は、東京帝国大学の模倣であり、落とし子であったことが良く分かる。ただし、差別化も見られる。先述した藤井こそ（東京）帝国大学の卒業生であるが、それ以降に着任した教員は京都帝国大学の卒業生である。加えて、彼らの初期の論文業績を見ると、京都帝国大学が出版している雑誌『国語国文の研究』での発表が多い。このように東京帝国大学に依存しない形で教員を養成していたことが分かる。

ただし、大学教育を受けていること、自大学が出版している雑誌に研究業

績を掲載することが教員の条件となっているという点で、東京帝国大学と構造は同じである。

次に、教員数を見ると、国語学 1 名、日本文学 1 名の体制で開始している。東京帝国大学より人員が少ない体制であったことが分かる。先行研究でも、京都帝国大学が東京帝国大学との比較で、規模が劣ることが明らかにされているが(天野 2009)、その帰結としてこのような人員体制となっていると思われる。

その後、1919年に第一講座として国文学専攻が設置され、2名体制にはなるものの、新制大学発足直前の日本文学研究者は2名であった。

次に、教員の専門性に着目すると、先述した藤井乙男が近世文学、その後着任した沢瀉久孝は上代文学と専門性を整理できる。両者の退職後も近世文学と上代文学の教員が着任しており、裏を返すと、2名体制のもとで、中古文学や中世文学の研究者を雇用する余地は無かったといえよう。繰り返しになるが、時代区分が現在ほど明確ではない時代とは言え、2名体制で教育することの限界があった可能性は指摘できよう。

### 5.3 東北帝国大学及び九州帝国大学の事例

ここからは、東北帝国大学の事例を見ていくこととする。東北帝国大学の場合、文学部ではなく法文学部が設置されることになる。同学部は、法学部、経済学部、文学部を一つの学部としたものとされている(東北大学百年史編集委員会 2003)。このように、同大学は、京都帝国大学よりさらに規模は小さいものとなる。初代教授は、岡崎義恵で東京帝国大学の出身者である。彼もまた、東京帝国大学で教育を受け、「帝国文学」で業績を残している点では東京帝国大学の教員と置かれていた状況は同じである<sup>12)</sup>。

次に、講座の状況であるが、東北大学にも国語国文学講座が設置され、最初の日本文学の教員数は1名であった。その後、2名体制となるのは、戦後の1950年の北住敏夫の着任まで待つこととなる。

岡崎の専門分野については議論が難しい。というのも、岡崎は東北帝国大学において、文芸研究の学風を形成するため、革新的な研究を行ったからである(林 2011)。実際、論文の専門分野を見ても岡崎の専門についての整理は難しい。しかし、1名体制では、教育の専門の幅という点で限界があったことは指摘できよう。

最後に、九州帝国大学の検討を行う。九州帝国大学も東北帝国大学と同様に法文学部が設置されており、国語国文学講座が設置された。国語学 1 名、

日本文学 1 名の体制で開始している。日本文学の初代教授は小島吉雄が就任している。その後、国語学者の春日政治の後任として日本文学者の高木市之助が着任し、日本文学研究者が 2 名の時期はあったものの、裏を返すと国語学の教員が不在の時期が生じたことになる。恒常的に 2 名の日本文学者を確保できるようになるのは、1950 年の杉浦正一の着任を待たねばならない。

小島は京都帝国大学の出身者で、同大学が発行している『国語国文の研究』で業績を残しているという点で、「帝国大学モデル」の教員である。

小島については、中世和歌で博士論文を執筆しており、専門は中世文学というイメージが強いが、近世文学や近代文学の研究業績も多く、幅広い時代を取り扱っている。だが、1949 年の新制大学発足まで 1~2 名体制であり、教育の幅に限界があったことは指摘できよう。

東北帝国大学と九州帝国大学の両者の教員に共通していることは、帝国大学で教育を受けた上で、その後も帝国大学が準備した雑誌で研究成果を発表していることである。『国語と国文学』、『国語国文の研究』といった雑誌に研究成果を残すことが教員として求められたのである。

このように見ると、東京帝国大学及びそれに続く帝国大学の教員集団については、芳賀矢一を嚆矢として、帝国大学モデルで説明が可能であると思われる。事実幸田露伴以外に例外は無く、後発の帝国大学は東京帝国大学を模倣していたことが改めて分かる。

しかし、東京帝国大学こそ教員数の増加が見られたものの、その後に設置された大学では、東京帝国大学と比して教員数は少なく、結果として専攻の中での専門性の幅が狭かったことは想像に難くない。これが、帝国大学の一つの側面であったことは指摘できよう。

#### 5.4 早稲田大学の事例

帝国大学との比較軸として、ここからは早稲田大学の事例を見ていきたい。戦前の私立大学が経営上の困難を抱えていたことは先行研究が明らかにするところである（天野 2009）。実際、教員組織が脆弱であったことは想像に難くない。

早稲田大学についても年史が出版・公開されていることから、それに基づいて、教員集団を見ていくことは可能である。ただし、同書には、設置された科目とそれを担当する教員の記述があるのみで、専任教員かどうか判断することができない。この点、帝国大学関係の年史には必ず講座担当の教員が明記されていたのとは異なる。そこで、早稲田大学の年史に記載された担

当教員名を基盤にしつつ、関連する資料も用いながら、同大学の日本文学の研究者の検討を行いたい<sup>13)</sup>。

早稲田大学における文学系学科の創設に大きく寄与したのは、坪内逍遙である。彼は、東京大学の卒業生であり、早稲田大学の「文学」の形成が帝国大学卒業生に支えられていた点は議論の余地がない。

年史には、東京専門学校に文学科が開設された頃の日本文学関係科目とその担当教員が記されている（早稲田大学大学史編集所 1990）。初期の東京専門学校の文科で教鞭をとっていたのは、大学教育を受けていない国学者に加えて、帝国大学に創設された古典講習科の卒業生等のようである。初期の東京専門学校は帝国大学の関係者に依存していたことが窺える。

ただし、自校出身者を教員に受け入れる体制は早期から整備している。年史では早稲田における日本文学の碩学3名として、五十嵐力、窪田空穂、山口剛の名をあげている。

五十嵐については、東京専門学校文学科の三期の卒業生であり、1900年に東京専門学校の講師に着任し、1902年には昇格前の「早稲田大学」講師に着任し、1945年には早稲田大学の名誉教授となっている。

窪田も、東京専門学校の卒業生で、1920年に早稲田大学文学部国文科の講師に着任している。これは、早稲田大学の大学昇格のタイミングである。その後、1948年に名誉教授となっている。窪田の場合、早稲田大学着任までは歌人等多岐に渡る活動が見られる。アカデミアとは無縁のものが、大学教員として迎えられた点で、帝国大学の教員とは趣を異にしているといえよう。

山口は、1912年に高等師範部の講師となっている。その後、1924年に早稲田大学文学部の教授となっている。山口の場合、高等師範部の出身であり、高等師範部の教員時代の期間も長い。

ここで強調すべきこととして、彼らは大学教育を受けた経験がないということである。帝国大学の教員に関しては、「帝国大学」出身者であることがほぼ必須の条件であった。一方で、早稲田大学の場合、専門学校や高等師範部の出身者がいち早く教員になっている。なお、早稲田大学百五十年史編纂委員会編（2022）に基づけば、早稲田大学が大学に昇格した時の大学教員の多数派が帝国大学の出身者で、東京専門学校出身者は少数派であったとされる。彼らの就任は、日本文学という専門であるがゆえに実現できたものであったのかもしれない。

次に、彼らの初期の研究業績について見ていくこととする。初めに、早稲

田大学が自身のジャーナルとして、『国文学研究』を発行するのは、1933年である。すなわち、彼らの初期キャリアにおいて、帝国大学で見られたような自大学が出版する雑誌が存在したわけでもなく、図書で「研究成果」を数多く発表していることが多い。なお、時代が少しくだる山口については、先述した『国語と国文学』や『国語国文の研究』といった雑誌での業績が見られる。少なくとも、帝国大学モデルで見られた、教員に求められる指針は存在しないように思われる。

このように見た場合、帝国大学教員のキャリアと大きな差異が見られる。それは、大学での教育経験は必須とされず、初期の研究業績は帝国大学の教員のような明確なモデルが無い中で、教員が形作られていったということである。そしてその後、早稲田大学の教員数は拡充していくことになる。

次に、彼らの所属に着目したい。五十嵐については、大学昇格までは大学の所属で、昇格後大学の教員となる。そして、大学昇格時に、アカデミアとは関係が薄かった窪田を受け入れている。山口は長らく高等師範部の所属で、1924年に大学の所属となっている。すなわち、早稲田大学の場合、大学以外に設置された学校群に所属しているものもまた学の形成の担い手となっていたのである。

ここに、帝国大学とは異なる教員像が見える。帝国大学の場合、大学が設置され、講座制が開始されることで、日本文学の研究者が法律上も定義されることになるが、裏を返せば、それ以外に「居場所」が設定されなくなるのである。そして、その定員も、東京帝国大学こそ4名までは増えたものの（長らく2名体制が続いた）、その他の大学では1名から2名という状況にあった。加えて、専門部や高等師範部の設置が行われておらず、日本文学研究者の勤務地が講座以外に確保されることはなかった。当然のことながら、非常勤講師を雇用する等、教育の多様化と専門性の拡大等の工夫はなされていたとは思われるが、その人物が学の担い手になっていたとは考えにくい。

一方で、早稲田大学においては、経営上の問題から、専門部や高等師範部の設置が求められたが、同時にそこは日本文学研究者の勤務地になりえたと考えられる。結果として、これらの教員を活用した多様な教育が行われた側面はあったと思われる。実際、早稲田大学の場合は、この論理が有利に働くことになる。先に述べた、三名について、中古・中世の五十嵐、和歌・俳句の窪田、近世の山口と専門分野の整理が可能であろう。先に見てきたように、帝国大学と比較しても、早稲田大学は一定の専門性の幅を早期から確保



することが可能であったと考えられる。

それでは、彼らの研究者としての評価はどのようなだろうか。彼らの業績は今なお、受け継がれている点は指摘できる（兼築 2024）。窪田は近代「国文学」の肖像の一人として、「国文学」の形成を担ったものの一人に選ばれている（田淵 2021）。山口については、近世文学会が近世文学研究黎明期を代表する研究者の一人として選択している（井上 2017）。彼らの学問は今も受け継がれているのである。

戦前の早稲田大学は、教育・研究の条件は帝国大学と比べれば劣悪であったのかもしれないが、教員数とそれに伴う教員の専門性の幅という点では有利な側面があった可能性は考えられる。

## 6. 知見の整理と含意

### 6.1 知見の整理

日本文学については、東京大学創設期に、日本文学研究者の配置が見られたが、その役割を担ったのは国学の伝統を継ぐ学者だった。それが、講座制の導入を契機に、他の分野と同様に、古いタイプの教員が離職し、大学教育を受けた教員集団へと変貌をとげ、その後の帝国大学教授はその形を維持していくことになる。

その後、遅れて設立された京都帝国大学では、基本的には東京帝国大学と同様の形で教員が生産される。それは東北帝国大学や九州帝国大学でも踏襲された。これらの大学は、教員に求められることこそ模倣しているものの、その教員規模は東京帝国大学よりも小さいものであった。

一方で私立大学については、大学に認定されない形で学校が開始され、その後専門学校への認定、さらには大学への昇格を経ることになる。当初こそ、帝国大学関係者に依存しながら、学の形成が行われていたが、徐々に自学出身者を教員として雇用していくことになる。

しかし、私学の自校出身者は「大学」の卒業生ではなく、帝国大学教員と比して、明確なモデルやルートがあったわけでもない。加えて、所属先も大学や併設の高等師範部の所属等と様々である。しかし、併設の学校群こそが、帝国大学にはない、日本文学研究者の「居場所」たりえたのである。これらの学校群に所属している教員もまた、大学教育を行うとともに、研究を行い、学を形成していった。それは、教員群の専門性の幅という点では、帝国大学と同等の専門性の幅を獲得させることにつながった可能性がある。

## 6.2 含意

本論を踏まえると、戦前期の帝国大学は未完の大学群であった。一方で、市場型とされる私立大学においては、単に帝国大学を補完する教育機会の場としての機能だけでなく、学問の形成と発展に寄与していたとも考えられる。特に、経営の論理で説明される専門部や高等師範部は、研究者の「居場所」でもあり、そこが学の形成に深く関わっていた可能性が示唆された。

帝国大学は、国家からの潤沢な支援と講座制度の庇護のもとで、日本をリードして教育と研究を行っていたのは間違いない。しかし、後続の帝国大学は東京帝国大学と比して、規模が小さく、専門分化していく学問に十分に対応できていたのであろうか。国家からの庇護は、一方で国家からのコントロールであったともいえる。実際、彼らは、研究環境を落として、教員数を増加させることなどはできなかったからである。それとは対照的に、国からのコントロールが弱い私学セクターは、柔軟に学校の形態を整備し、そこに研究者の居場所を設定、専門分化にいち早く対応した。

ただし、私立大学の市場モデルにも課題があった。それは、東京への一極集中である。実際、本稿で扱った大学のすべては東京に設置されている。この状況は、多くの私立大学が非常勤講師として帝国大学教員に依存していたことに起因する。

それでは、東京一極集中を打破したのは何か。それは帝国大学の設置であった。初めに京都に、次に東北、そして九州といった風に、日本文学を扱う居場所が地方に設置されたのである。やはり、この知の再配分を実現できるのは、公的セクターなのである。

最後に学の生成から含意を得たい。戦前期の状況を見れば、芳賀が日本文学の文献学の基礎を切り開き（佐々木 2021）、その後の池田が源氏物語研究を通してそれを実現させるに至っている（高木 2024）。すなわち、中古文学の中心に位置づく『源氏物語』を例に見れば、池田による文献学的な研究の基礎は一応の完成を見ていると評される（高木 2024）。戦後の源氏物語研究は、このような戦前期の基礎的研究をもとに展開していくことになる。戦前の研究が批判的に見直されるのは、佐々木（2007）まで待つことになる。それほどまでに、戦前期の研究成果は戦後の学术界に影響を与え続けたのである。

このように、東京帝国大学は確かに、その学問を発展させるとともに、戦後の学术界に大きな影響を与えてきた。一方で、日本文学内に「美」を見出し、文芸研究を開拓したのは、東京から離れた東北帝国大学の岡崎であった

(林 2011)。文献学の研究者が実証性を重んじる一方で、岡崎らの文芸学者は、「美的理念に注目した議論」を行い、日本文学の新たな手法を導入することになる(高木 2024)。また、明治期から大正期において、その学問的基盤が曖昧であった近世文学という学問の形成の貢献を担ったものの一人は、早稲田大学の山口であった。山口は、東京帝国大学の国語国文学教室が出版している『国語と国文学』において、論文を複数執筆するとともに、現代においてもその成果は評価されるに至っている(井上 2017)。そして、彼は、高等師範部の卒業生であり、長らく高等師範部の教員であった。

以上のように帝国大学が学の基盤の全てを作り、発展させたというわけではない。そこには多様な学校群があり、多様な環境のもとで、学を形成させていったのではないだろうか。

思い起こせば、戦前の日本文学は、東京への一局集中の状態にあり、帝国大学はその中心にいた。それは、現代的な表現を借りれば「選択と集中」を具現化したものとも考えられる。医学や工学は各地の帝国大学はもちろんのこと、専門学校でも学べ、その教育を支える研究も同様に行われていた。それとは対照的に、日本文学を扱う場は、帝国大学を中心とした限られた学校群にしか存在していなかった。その結果である帝国大学が学問的基盤の形成に大いに貢献したことは論を俟たない。しかし、東北帝国大学における文芸研究の形成は一つのイノベーションであったし、近世文学の開拓の担い手の一人が私学セクターから生まれたことは、「選択と集中」の外にも大きな可能性があることを示唆している。

## 7. おわりに

残された課題は多い。むしろ、本研究は、日本文学の形成過程を従来の研究とは異なる形から問い直す研究の始まりに立ったものである。

今後の課題として、本稿では扱えなかった学校群の検討や本稿で扱った時期以降である新制大学発足から現代までの学問知の形成過程について検討を行うことも期待される。

また、本稿では、教員の教育歴、講座制が構築される中での教員の変貌、執筆した論文に基づく検討といった事項を研究の手法として提示した。本手法を用いて、日本文学以外の分野での検討を行い、日本文学との比較を行う研究は必要であろう。こうした過程を経ることで、日本文学の学問上の特性が明らかになるとともに、本稿で提示した方法論等に対する評価も下せ

ると考えられる。

本稿で行ったような個々の専門分野の学問知の形成過程に関する知見を積み上げることで、日本的高等教育の特質が明らかにされると考えられる。その点で後続する研究が期待される。

## 注

- 1) ただし、そのような研究は以前から存在しており、加速したと考えるべきであろう。
- 2) 本稿では、日本文学と国文学を同義として扱い、本文では日本文学の呼称で統一することとする。
- 3) 実際、日本文学不要論は継続して存在する。また、高校の国語で論理国語の導入に伴う、古典文学の選択制等も導入されている。義務教育で、皆が学ぶ学問であるがゆえに、議論されやすい傾向にある分野と言える。
- 4) 帝国大学については、京城帝国大学、台北帝国大学の設置が見られるが、本稿の全ての議論から除外している。
- 5) 東京外事専門学校や大阪外事専門学校の設置は見られる。
- 6) 確かに日本文学研究者が旧制高校で教鞭をとっていた例は多いが、あくまでも国語科の教員として着任しており、研究と教育内容が必ずしも一致しているわけでもなく、学問の継承者を養成しているものでもないため、今回は考察の対象から除外した。
- 7) 専門部の設置は官立大学でも行われている。しかし、経営の論理で設立されたわけではなく、設置の論理は大きく異なる。
- 8) これ以外にも、多くの「大学」で、文学部は設置されている。総合大学化の過程で設置するものに加えて、宗教系大学でも文学部の設置が見られた。
- 9) 国語学教授上田萬年においても同様のことが生じている。
- 10) 物見高見と芳賀弥一の関係については、物見の帝国大学離職後も共著があるなど、関係性は認められる。個人的な問題というよりかは、組織的な問題であったことが考えられる。
- 11) この点は、橋本（1995）にも詳しい。
- 12) なお国語学の教員として着任した山田孝雄のように、大学教育を受けていないものを教員として受け入れる状況もあった。初期の東北帝国大学ではその逸脱が許容される状況下にあった。
- 13) 早稲田大学の教員の状況については、戸村（2017）に詳しい。

## 参考文献

- 天野郁夫、2009、『大学の誕生（上）（下）』中央公論新社。
- 天野郁夫、2017、『帝国大学：近代日本のエリート育成装置』中央公論新社。
- 藤田大誠、2007、『近代国学の研究』弘文堂。
- 橋本鉦市、1995、「わが国における文学部の機能と構造（1）－帝大文学部の教授集団の分析を中心として－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』35: 129-47。
- 橋本鉦市、1996a、「近代日本における「文学部」の機能と構造」『教育社会学研究』59: 91-107。
- 橋本鉦市、1996b、「明治・大正期における文学部卒業生の社会的配分と役割」『大学史研究』12: 3-15。
- 林廣親、2011、「国文学と民俗学・歴史社会学・文芸学」長島弘明編『国語国文学研究の成立』放送大学出版会、78-94。
- 井田太郎、2014、「〈実証〉という方法－〈近世文学〉研究は江戸時代になにを夢みたか－」井田太郎・藤巻和宏編『近代学問の起源と編成』勉誠出版、272-97。
- 井上泰至、2017、「ラウンドテーブル「近世文学研究の黎明」報告」『近世文藝』106: 57-62。
- 兼築信行、2024、「『国文学研究』第二百集刊行に当たって」『国文学研究』200: 1-2。
- 国文学研究資料館、『国文学・アーカイブズ学論文データベース』。(https://ronbun.nijl.ac.jp/, 2024.7.29)
- 國學院大学校史資料課編、1994、『國學院大学百年史（上巻）』学校法人國學院大学。
- 久保田淳編、1997、『日本文学史』おうふう。
- 京都大学百年史編集委員会編、1997、『京都大学百年史 部局史編 1』財団法人京都大学後援会。
- 九州大学百年史編集委員会編、2014、『九州大学百年史第4巻 部局史編 I』九州大学。
- 丸山文裕、2002、『私立大学の経営と教育』東信堂。
- 文部省大学学術局技術教育課編、1998、『専門学校資料』大空社。
- 長島弘明編、2011、『国語国文学研究の成立』放送大学出版会。
- 日本大学編、1982、『日本大学九十年史上巻』日本大学。
- 日本学術振興会、1961、『大学研究者・研究題目総覧：専門別 1961年版』日本学術振興会。
- 日本学術振興会、1971、『大学研究者・研究題目総覧：専門別 1971年版』日本学術振興会。
- 大川一毅、1993、「近代日本の大学における『文学部』の成立について－東京大学『文学部』」『フィロソフィア』80: 99-117。

佐々木孝浩、2007、「大島本源氏物語」に関する書誌学的考察『斯道文庫論集』41: 165-200。

佐々木孝浩、2021、『近代「国文学」の肖像 第1巻 芳賀矢一：「国文学」の誕生』岩波書店。

新堀通也、1965、『日本の大学教授市場』東洋館出版社。

諏訪春雄、2014、『国文学の百年』勉誠出版。

田淵句美子、2021、『近代「国文学」の肖像 第4巻 窪田空穂「評釈」の可能性』岩波書店。

高木和子、2024、「平安文学研究の百年を振り返る」『國語と國文学』101(11): 70-85。

竹内洋、2003、『教養主義の没落』中央公論新社。

寺崎昌男、1972、「帝国大学形成期の大学観」『学校観の史的研究』講談社。

寺崎昌男、2007、『東京大学の歴史』講談社。

東北大学百年史編集委員会、2003、『東北大学百年史四 部局史一』東北大学出版部。

東京大学百年史編集委員会編、1986、『東京大學百年史部局史一』東京大学。

戸村理、2017、『戦前期早稲田・慶應の経営』ミネルヴァ書房。

早稲田大学大学史編集所、1990、『早稲田大学百年史別巻 I』早稲田大学出版部。

早稲田大学百五十年史編纂委員会編、2022、『早稲田大学百五十年史 第一巻』早稲田大学出版部。

山田浩之、2002、『教師の歴史社会学』晃洋書房。

## 執筆分担

本稿は、2節から5節については、協議しながら進め、原田が執筆した。また1節と6節、7節は共同執筆で行った。

## 謝辞

本稿は、JSPS 科研費 22K02683 による研究成果の一部である。また、有益なコメントをくださった査読者2名に心より感謝申し上げる。